提言 私たちはふたたび江戸に攻め込む時期に来ているのではないか（前編）。

◉花房尚作（曽於市在住）

中央主権を軸とする現在の政府を潰して、地方分権を軸とした新しい政府をつくる。
鹿児島は、日本各地の地方と連携し、大きなうねりをうみだす力は充分にある――

ハチロクニュースでは地域密着型の出版社や書店さんがよく登場する。私はそれらの記事をいつも好ましく読んでいる。出版社さんには、地域の風土的個性や、隠れた人材をどんどん発掘してほしいと願う。書店さんには、論理性や美意識などの大切さを伝え続けてほしい。

書店は全国的に減っているが、一店舗あたりの延べ床面積に占める割合は増えている、という調査結果もある。地方の田舎の書店や、専門書を扱う小売店が減って、都市部の書店が大型化している。たとえば、首都圏では待ち合わせ場所を書店にすることがよくある。首都圏の書店は多くの若者たちで溢れているし、棚に並べられたラインナップを眺めているだけで世情がわかる。首都圏の住民が世の中の流れを知るのはもっぱら書店だ。

地方の田舎は違う。TV の情報番組で世の中の流れを知ろうとする。住民と話をしていると「読書は変なオジサンがやること」と言う。読書に馴染みがなく、アカデミズムを疎遠なものとして捉えている。そのような地域では TV 番組に親近感を持ち、プロスポーツ選手や芸能人が憧れの対象になる。

それは仕方がないことでもある。地方の田舎では、成長志向や発展思考を持つ住民が転出している。従って、学びの意識や、文化資本の価値が低くなる。地域全体として興味や関心の幅が狭く、知的好奇心が乏しい。

私は海外の貧困地域をよく訪れているが、そこで感じた雰囲気は、私が暮らす大隅半島とよく似ていた。その共通点は、発展思考や成長志向を持つ者たちが地域から去ることだ。現状に満足している者たちが地域に残ることで保守性と閉鎖性が強くなる。それゆえ、地域内の雰囲気がとてもよく似ている。

実際に、日本の過疎地域対策は、海外の貧困地域対策を基にして進められてきた。農村社会から近代社会への転換を図って失敗する流れや、住民の内発性や自立性を問う流れも同じだ。

日本の官僚は海外の政策や学術に精通し、その知識を日本に持ち込むかたちで政策を立案している。明治時代はヨーロッパ大陸を模倣して、議会制民主主義の導入や憲法制定などを進めた。戦後はアメリカ合衆国を模倣して、経済や外交などの政策を進めている。その流れの中で、過疎地域対策は「開発経済学」の影響を強く受けてきた。開発経済学とは、アフリカなどの貧困地域を分析して、貧困はなぜ起こるのか、貧困はなぜなくならないのか、といったことを考える学問である。

過疎地域と貧困地域を同列に扱うことに批判的な者もいるだろう。しかし、現実問題として、競争よりも協調を重んじる思考様式は同じであるし、資金援助（補助金）に依存する組織構造も同じである。そもそも、日本人の生活水準は世間で言われているほど高くはないし、裕福でもない。

一人あたりの名目GDPから見る日本人の生活水準

生活水準の高い地域		日本の生活水準		大隅半島の生活水準	
1	ルクセンブルク	31	キプロス	61	モルディブ
2	アイルランド	32	日本	62	コスタリカ
3	スイス	33	スペイン	63	パラオ
4	ノルウェー	34	ブルネイ	64	ブルガリア
5	シンガポール	35	クウェート	65	アルゼンチン
6	アイスランド	36	スロベニア	66	ロシア
7	米国	37	サウジアラビア	67	メキシコ
8	カタール	38	台湾	68	セントルシア
9	マカオ（中国）	39	チェコ	69	カザフスタン
10	デンマーク	40	エストニア	70	トルコ

出所)IMF- World Economic Outlook Databasesを基に筆者作成

そこで、名目 GDP を使って生活水準を確認したい。日本の名目 GDP は 2023 年にドイツに抜かれて、世界第 3 位から 4 位に落ちた。御存じの通り、名目 GDP は、特定の期間内に国内で生産された財やサービスの総価値である。当然ながら、人口規模の大きい国家は名目 GDP が高くなる。日本の総人口は約 1 億 2 千万人である。その日本が人口約 8 千万人のドイツに抜かれたというのは、日本人の生産性の低さを物語っている。

そこで、国民の生活水準を正確に捉える手法として、国家の名目 GDP を人口規模で割った「一人当たりの名目 GDP」を確認したい。国際通貨基金（IMF）によれば、日本の一人当たり名目 GDP は 32 位である（2023 年）。私たちの生活水準は中堅国家と同程度で、29 位の韓国よりも低い。

では、過疎地域はどうだろう。大隅半島の平均年収は、日本人の平均年収の約半分になる。地方公務員が平均年収を底上げしているので、実際は半分以下と考えてもらってかまわない。国際的には 65 位以下の生活水準になる。国内経済が崩壊しているアルゼンチンや、少数民族が分散するロシアや、麻薬が蔓延るメキシコと同程度だ。それくらい私たちの地域は貧しい。

今後、日本は少子高齢化の影響で労働人口が減少する。名目 GDP に支えられた日本経済の強靭さは失われ、ほんの些細な外的要因で国内が混乱する。しかも、社会問題の多くは既に手遅れで、政府は国債発行を繰り返して対処するしか方法がない。

そこで鹿児島県民に問う。私たちはふたたび江戸に攻め込む時期に来ているのではないか。中央主権を軸とする現在の政府を潰して、地方分権を軸とした新しい政府をつくる。鹿児島県民はそれくらいの気概があってもよいのではないか。

軍事的に戦うのは難しくとも、日本各地の地方と連携し、大きなうねりをうみだす力は充分にある。東京都がつくる TV 番組に憧れるのは辞めて、皆で「茶わん蒸しの歌」を合唱しながら江戸に攻め上がろう。さあ、ともに立ち上がろうではないか。

（後編は 5 月号にて）

花房尚作（はなふさ・しょうさく）
放送大学大学院修士課程修了、人類学修士。米国での 2 年間の就労を経て、海外 40 ヵ国、180 都市を周遊。専門は、田舎（過疎地域）の研究と、価値観の多様性の研究。大隅半島の現実を伝えた著書『田舎はいやらしい（光文社新書）』で注目を浴びる。新刊『田舎の思考』（光文社新書）を 8 月刊行予定。連絡先：info@sho39.com